

# 訪問診療に同行して

永源寺診療所所長 花戸貴司医師への取材から(その3)

フリージャーナリスト ● 佐藤 幹夫

## 地域に看取りの文化が根付くまで

近江市永源寺地区では、9割以上の人が在宅での最期を望んでいる。一方、永源寺診療所の花戸貴司医師が看取ったのは、そのうちの6割。3割の患者さんは、自宅で最期を過ごすことを望みながらも叶わず、病院で亡くなったということになる。花戸医師は、誰もが自宅での最期を迎えることができるわけではない、どうしても病院を選ばざるを得ない人も必ず出てくる、という。しかしまた花戸医師自身は、最期は絶対に在宅で、と推奨しているわけではない。地域の過半の人が、自ら在宅での最期を望むようになったのだという。

これを看取りの文化と呼ぼう。かつての在宅死は、医療アクセスが困難だったり、治療から見捨てられた結果としてのそれだった。経済事情もあれば交通事情もあるし、医療資源の乏しさゆえということもあった。もちろん、現在の永源寺地区は、このどれにもあてはまらない。花戸医師は述べるのだが、看取りの文化が永源寺地区に最初からあったわけではなく、永源寺診療所の医師となった最初の年の看取り数はゼロ。2、3年たって1人か2人。この頃から訪問診療の患者数が20人ほどになり、5年目で40人。7、8年ごろから看取りの数が20人を超すようになったという。

「私は前から、いつでも診ますよ」といっていたのですが、やはり住民の意識が変わってきたことが大きいですね。家で亡くなった人がお葬式をする、近所の人がお手伝いにいく、その場で、うちのお婆さんが診療所の先生に診てもらい、最期までお世話になった、それがとてもよかった、ということが「口」でひろがっていったようでした」

あるとき、ある家で看取りをし、1週間ほどした頃にお婆さんたち5人が紹介状をもってやってきた。どうしたのかと聞くと、最期まで診療所で診てもらいたいから、かかりつけ医を病院から診療所に替えたい、という。

「最期まで家にいたい、そういいたいんだ、という意識ができてきたのです。それが重要な変化でした。これまで来るのに10年はかかりました」

## 家族が突然決断を迫られたら

花戸医師とチーム永源寺の3回目。今回も現場からの報告となる。

(4)96歳女性、Dさん。

脳出血の後遺症があり、寝たきりになっている。在宅介護が13年と長期にわたっているが、息子さんのお嫁さんが、これまで一手に担ってきた。筆者たちが訪ねたとき、ちょうどリハビリのスタッフたちが帰ったところだった。ベッドの横には写真が2枚飾られていた。85歳と88歳のときのもので、旧永源寺町でのお祝いと近隣の市町と合併して東近江市になったからの米寿のお祝いで、撮ってくれたものだという。満面の笑みが溢れていて、こちらの気持ちも和ませてくれる。この日はたまたま娘さんも嫁ぎ先からやって来ていて、「早く亡くなったお父さんの所にいかせてあげたい」と繰り返していた。

「みんなには、診療所です。おばあちゃん、胸の音をきくわな」と顔を覗き込みながら話しかける花戸医師。「肺の音はだいじょうぶ」といい、お腹に触れながら、「胃」のうのあともき

れい。おばあちゃん、背中、診るわな」と、背中を診ていく。お嫁さんは、痰が多くなったといいい、呑みこんで、おばあちゃん、呑みこんで」と繰り返している。「ご飯は、□からですか」と花戸医師。「はい。食欲が、もうお歳やから思うんですけど、だんだん食べる量が少なくなっています」と花戸医師。「飲み込む力が、だんだん弱くなっている。肺に入ると、誤嚥性肺炎になるけど、そうならない程度にはまだ自分で出す力がある。どこかが悪くなって食欲が落ちていっているわけではなくて、飲み込む力が弱くなっている分、□から食べる量が減っている」

そして、花戸医師は尋ねた。「いつも皆さんに聴いてるんやけど、飲み込めなくなったり、心臓が弱ってきたとき、どこまで治療しますか。お嫁さんが答える前に、娘さんが口を開いた。「もう、はやくお父さんのもとにいかせて、楽にさせてあげたいです」。少し間をとった後、花戸医師は「寿命は、人それぞれ違いますし」とだけ答えた。お嫁さんも口を挟まなかった。花戸医師がもう一度、「おかあさん、おばあちゃんが、ご飯が食べられなくなったらどうしますか」と尋ねたが、お嫁さんは、「どう

しましよかな」とだけいい、それ以上の答えはなかった。「考えておいてくださいわね。じゃ、おばあちゃん、また来るわ、何かあったら、いうてな」と、立ちあがった。

次のお宅に向かう車のなかで、花戸医師はいった。「普通、寝たきりの人はエアマットにするんですが、お嫁さんががんばってはるし、リハビリの人が来てくれてベッドに座らせてくれたりするので、床ずれが全くできていないのですね。リハビリをしているときは、目もばっちり開けていますよ」

Dさんのお宅は專業農家で、田植えと稲刈りの時期の年に2回、ショートステイを利用していったという。数年前までは「コミュニケーション」が取れており、「ショートステイにくのが私の仕事」と口にしてきた。それでも、ショートステイでは熱を出すことが多かったという。

「今日は娘さんが嫁ぎ先から来ていたので、このときとばかりに、ご飯が食べられなくなったらどうするか、聴いたのです。本人も家族も急には決められないし、とくに家族は、自分たちが決めることで、本人の命を縮めてしまうのではないかと考える。任されることは大き

